

■ 目先のドル/円にはやや下げ過ぎた感がある！？

ユーロ/ドルが上値追いの展開を続けている。昨日（21日）は4日続伸で、一時1.1174ドル処まで上値を伸ばす動き。



左図を見てもわかるとおり、今週の週足ロウソクは、すでに昨年12月高値の水準を上抜けており、当面は昨年7月高値=1.1276ドルが上値の目安として意識されやすい。ちなみに、昨年10月安値と昨年12月高値、今年4月安値を元にN計算値として弾き出される当面の目標値は1.1292ドルということになる。

言うまでもなく、この強い動きは市場が「欧州中央銀行（ECB）よりも米連邦準備理事会（FRB）の方が今後大幅に金利を引き下げていく」との見方を強めていることが背景。周知のとおり、もはや市場は9月の米連邦公開市場委員会（FOMC）において米利下げ実施の決定が下されることを確実視している。

それどころか、一部からは「9月以降“毎回”利下げが実施され、1回の利下げ幅が大幅になるケースも出てくるのではないか」との声さえ聞こえてくる。さすがに、それは少々行き過ぎた見方であると思われるが、市場が「そのかなりの部分をすでに織り込んでいる」との前提のもとで、明日（23日）のパウエルFRB議長の講演内容を受け止めることが肝要である。

つまり、パウエル氏の発言が余程“ハト派寄り”に傾かない限りは、当面のドルの下値もそろそろ限られてくる可能性があるということ。昨日も、米労働統計局が3月までの1年間の米雇用者数を81.1万人も下方修正した基準改定値が公表されたが、市場の反応はさほどでもなかった。今さら米雇用情勢に関わる少々弱めの数値が出てきたところで、すでに市場が織り込み済みとしているレベルを超える予想に塗り変えられるということはないのである。

ただ、下図に見る通り、ドル/円の今週の週足ロウソクがこれまで強い下値サポートと見られていた一目均衡表の週足「雲」上限を下抜けてきている点はやや気になる。

それは、一つに明日の衆参両院の財政金融委員会に植田日銀総裁が出席することに対する警戒というものもあろう。事ここに及んで、日銀サイドもさすがに言動には慎重になっていると見る向きは多いが、海外勢を中心に「なおも日銀は利上げに前向き」と見ている向きも少なくないという。

むしろ、総裁の発言から「やはり日銀はかなり慎重になっている」との感があらためて得られれば、円は一旦売り戻されやすくなってもおかしくはない。

また、米・日株価を横睨みしながらの展開という意味では、米・日株価ともに8月に入ってから急落分をかなり取り戻してきており、当面の上値余地はそろそろ限られてきていると見られる点がドル/円の上値をも重くしている。既知のとおり、NYダウ平均やS&P500種などは、すでに急落分を埋めるか急落前を超える水準となっているし、日経平均株価に関しては「もともと3万8000—9000円あたりが足元の妥当値（予想PERで16倍前後）であって、4万円越えは少々行き過ぎだった」と捉えている向きが多いようである。

総じて考えると、この週末から週明けのドル/円はやや下げ過ぎた分を取り戻す動きになりやすいと個人的には見ておきたい。

